

炎上CMでよみとくジェンダー論

本書は家族社会学及びジェンダー研究者である筆者が、炎上したコマーシャルやPR動画を4つのモデルに設定して、章ごとに各モデルを当てはめながら分析している。読んでいると、私たちが日常的に目に入っているコマーシャル、記憶しているコマーシャルのどのような点がジェンダーの観点から考えて炎上したのか納得がいく。さらに、第1章では「男らしさ、女らしさ」、性別役割分担などジェンダーの入門的な解説もあって、格好のジェンダーの入門書となっている。

また、「広告の“炎上”史」として、本書が言及した55のCM・動画一覧が巻末に資料として掲載されており、興味深い。2015年以降は、地方自治体など公共性が強い組織が作成した動画の炎上が続いていることに気づく。「マイナリティと言葉の政治」(第5章)では、東京オリンピック・パラリンピックに向けた東京都ポスターへの筆者の問題提起が報告されている。本書全体に差別構造への筆者の真摯な向き合い方に共感した。

特定非営利活動法人
FCTメディア・リテラシー研究所 所長 西村 寿子さん



- 渡辺山角 著
- 光文社新書
- 2020年初版
- 820円(税別)

マイナリティ

本書第5章で言及する台湾の「金蘭醤油」のCMは、マイナリティを応援するメッセージとなっている。マイナリティとは、女性、子ども、高齢者、障害者、人種的・民族的背景、性的指向・性自認など、社会・経済・政治・文化的に周縁化されている人びとを指すが、商業的利益を優先させがちな主流メディアからの情報には、テーマや地域の偏り、マイナリティ市民への偏見やステレオタイプが存在する。したがって、CMを読み解く際には、本書が提起するマイナリティ市民の置かれた立場への想像力が重要になる。

新たな時代のジェンダー・イシュー ~性差と育児、科学と女性を問う~

2人の著者によって書かれているだけあって、この本のトピックは2つある。ひとつは、性役割獲得と家族に関するもの。そしてもうひとつは、科学と女性についてである。

タイトルに「新たな時代の」という言葉がついているように、結婚しない若者たちの現状や、父親の育児参加などの新しい家族現象と、なぜ科学の分野において「リケジョ」が育たないのか、またAI時代における女性研究者育成支援の動きなどが、分析の対象とされている。

個人的には、ほとんどの国で男性研究者の論文本数が女性のそれよりも多いにもかかわらず、まさに日本だけでは女性の方が圧倒的に論文数が多いというデータの紹介には、なるほどと思った。それでいて、30歳から44歳にトップリサーチャーの半分以上が集中するが、ここは圧倒的に男性が多い。女性は最初の8年以内こそとても生産性が高いが、結婚・妊娠・出産などを機に、再生産労働を担うために、離職すらしてしまうのである。これらの紹介される個々の興味深いデータが、どのような社会的なジェンダー構造の中で生じているのかを考えるのは、きっと私たちに与えられる課題なのだろう。

せんだゆき
武蔵大学 社会学部 社会学科 教授 千田 有紀さん



- 信田理奈・
村上涼 編著
- 三恵社
- 2020年初版
- 1,800円(税別)

再生産労働

再生産労働には、2つの意味がある。ひとつは、帰宅した労働者の疲れを癒し、ケアして、また働く状態にしてあげること。もう一つは、子どもを産み育てるということである。両方ともが主に女性によって、無料で担われている。この家事育児の無償労働について切り込んでいったのが、「逃げるは恥だが役に立つ」のTV版ドラマである。「やりがいの搾取」など、徹底的に無料で行われる労働に焦点化されるさまは、爽快だった。ヒットの秘密はそこにある。

21世紀の「女の子」の親たちへ ~女子校の先生たちからのアドバイス~

筆者のおおたとしまさ氏は、教育ジャーナリストで60冊以上の教育関係書を執筆。2019年は『新・女子校』という選択並びに本書の『男の子』版などを出版している。

本書の帯に「女子がありのままでいられれば、社会は変わる!」とある。一方、公益社団法人ガールスカウト日本連盟のジェンダー教育資料の表紙には、「少女が変われば、世界が変わる」と書かれているが、趣旨は同じである。筆者が主張するように「教育は男の子向けに作られている」日本社会では、少女が変わらなければ社会は変わらない。女の子を伸ばすことに成功している女子校のベテラン教員の見解を引用して展開している本書の主張の背景に、女子校では、女の子がありのままでいる、という実態がある。

活躍している女性リーダーには女子校出身者が多い。また、「イスラム圏で女子の理数力が高いわけ」で、私の勤務学校でも理数教育を進めていることが正しい方向であることが実証された。

「女子と男子のモチベーションの違い」、「必要なのは道徳教育よりも人権教育」、「性(セクシュアリティ)教育は人権教育」などジェンダー平等教育にとどまらず、筆者が理想とする教育觀にあふれている。

十文字中学・高等学校 校長 橋本ヒロ子さん



- おおたとしまさ 著
- 祥伝社
- 2020年初版
- 1,500円(税別)

セクシュアリティ教育

第2章が自分を守るために性教育と平和教育となっている。8節の「人権教育としての性教育」のところに、『海外でもセクシュアリティ教育とか包括的セクシュアリティ教育と言っている』と書かれている。国連の会議でもsex educationとは言わず、comprehensive sexuality educationもしくはsexuality educationを使っている。その方がLGBTも包括できるので、個人的には「セクシュアリティ教育」の方を使うべきだと考えるし、提案する。

&MORE 手に取りやすい一冊

親になつたの私だけ!?

お茶の水女子大学 基幹研究院 准教授 西村純子さん

冒頭でてくるのは、お迎えに間に合うよう定時で帰宅し、子どもたちを安全に監督しつつ夕食を作つて食べさせる、そんな夫の姿である。どうやってそんな夫に?!当然、疑問が湧く。

結論から言うと、夫「改造」のコツなどない(あるはずもない)。すべては妻の汗と涙の「戦い」の果実だ。新生児のオムツ替えや沐浴を「怖い」といって拒否する夫に、体力気力の限界寸前で育児を叩き込む。保活※を「大変だね」と他人事のように言う夫に、「お前も考えろや!」と迫る。夫は一緒に子育てする盟友になるはずだったのに、一番最初に倒さなければならぬ敵だと気づき、むなし思ひを抱えながらも交渉を続ける。夫がある程度家事・育児に慣れてくると今度は、世の中の夫に比べたら、洗濯も買い物も、子どもの抱っこもこんなにやっているのに怒られる理由がわからない、と反論される。ひとつひとつのエピソードが、夫とのバトルに日々孤軍奮闘する女性たちの思いを、見事に代弁してくれている。



- 漫画 ゆむい
原作 耳たぶが吸つてたも~れ
- KADOKAWA
- 2020年初版
- 1,050円(税別)

さらに本書でハッとしたのは、そうしたバトルを展開するなかでの、社会に対する気づきが丁寧に描写されていることだ。保育園に入れず、仕事に復帰できなくとも、それを「自己責任」に帰してしまうような社会への気づき、悪いのは夫「個人」ではなく、その背後にある社会ではなかったのかという気づき。バトルの「土俵」を見据えつつ、夫に、社会に向かう主人公の姿は爽快だ。もしかすると夫「改造」の肝は、そこなのかもしれない。

※子どもを保育園に入れるために保護者が行う活動